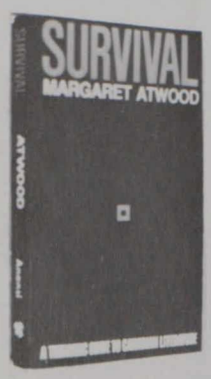
気でメープル・リーフとか騎馬警官隊を取入れて、観光カナダのイメージに合致するカナダ賛歌をものしたりする。この手合いは、どこの国にもいるものだ）。とにかく自分が抱いている甘美なカナダのイメージに合わないからといって、カナダ文学が提示する厳しい、ときとして暗鬱なカナダ像から目をそらしてはならないように思う。

ではカナダ文学にみられるカナダのイメージは、具体的にどういうものか。カナダ文学には、どういう社会が、どういう家庭が、どういう人物が描かれることが多いのか。つまりカナダ人の自画像は、どういう形をとるのだろうか。こういう問いに対する答えを求めるのが、カナダ文学を読む楽しみの一つなのだが、いつも明るい楽しい解答がえられるとは限らない。

カナダの詩人・小説家マーガレット・アットウッドに『サヴァイヴァル（生き残ること）』という題名のカナダ文学案内がある（一九七二年刊）。これは、きわめて個性的かつ挑発的にカナダ文学のテーマをさぐった名著だが、その中で著者は、いろいろの角度からのカナダ文学の性格づけを試みている。たとえばカナダ文学の支配的イメージは何か。それこそ「サヴァイヴァル」だとアットウッドは断定する。勝利を博する（たとえば大自然に対し、また西部に対し）というのはアメリカ文学にふさわしいかもしれないが、それはカナダ文学とは無縁のもの。じっと耐えて生きぬく、それがカナダ文学のライトモチーフだと著者はいう。



E・T・シートンやチャールズ・G・D・ロバーツの動物物語にしても、いかに動物たちが生きぬいていくかというのが主要テーマになっていたし、カナダ文学（主として小説）の登場人物をみても、孤独と戦い、自然の厳しさと戦い、社会の無理解と戦い、勝ちはしないが、とにかく生き残っていくというのが圧倒的に多いことに気がつく。「生き残る」というのは、カナダ人にとって、きわめてポジティヴな価値になっているのである。もともと華々しい勝利を求めたりしないのが、カナダの国民性であり、それが文学に反映している、ともいえるのである。

個人を圧殺するものとしての家（ファミリー）のイメージも、カナダ文学に濃厚だという。トマス・ウルフの「二度と家へ帰れない」に象徴されるように、決然と家に背を向け、新天地を切り拓くのがアメリカ文学の主人公なら、家を逃れ難い罠としてとらえ、それに耐えるのがカナダ文学の主人公である。日本でよく知られているルイ・エモンの『白き処女地』の女主人公マリア・シャドレーヌにしても、脱出する自由があったように思われるのだが、結局、自分の母親と同じように、北ケベックの自然の重圧の中に生きていく道を選んでいる。その意味で、これは典型的にカナダ的な作品なのである。カナダでは、自分の家の重圧に苦しみながら、あえて離脱しないケースが多いのは、アメリカ人に比し、そうじてカナダ人は消極的で退嬰的だからという国民性に立つ議論もある。その論議の当否はともかくとして、果敢な行動力に欠ける男性（いわゆるダメ男）がカナダ文学の主人公として登場することが、いかに多いことか。

ある意味でもっともカナダ的な小説といってもいいシンクレア・ロスの『私と私の家についていえば』（一九四一）は、不況下の平原州を舞台としたある牧師夫妻をめぐる話である。主人公は生活のためやむをえず牧師になり、その妻と共にホライゾンという田舎町の教会に着任するが、町の名（「地平線」！）の伸びやかさと対照的な人間関係の狭小さに苦しみぬく。最後にある事件をきっかけとして、牧師夫妻はこの町をあとにするのだが、主人公の牧師は、終始、自閉症的な、なんとも冴えない男として描かれている。読んでいてけっして楽しいものではないが、ああこれがカナダの男であり、カナダの社会（の一面）だということを実感させるふしぎなリアリティがあり、忘れ難い作品になっている。

同じくパッとしない男を主人公にして、多くの愛読者をもっている小説に、ブライアン・ムーアの『ジンジャー・コフィーの幸運』（一九六〇）というのがある。主人公ジンジャー・コフィーはアイルランドからモントリオールへやってきた移民。彼は、題名と裏腹に、なすことすることすべてうまくいかず、女房にも見放される、はなはだうだつの上がらぬ男である（うだつの上がらぬ移民も、カナダ文学の重要テーマである）。ところが、このうだつの上がらぬ男の姿に、多くのカナダ人読者は自己の像を見るらしく、ふしぎな人気を保っている。この主人公は、まぎれもなく実人生の敗者だった。しかし、最後に彼が到達した心境は読者の心を打つ。つまり、この世では、生きるということが、生き続けるということが、すなわち勝利なのだということを、ジンジャー・コフィーは悟るのである。こういう作品を読むと、アットウッドがカナダ文学のライトモチーフに「サヴァイヴァル」をもってくるのは当然だという気がする。

以上、アットウッドの論考を手がかりに、断片的にカナダ文学の一端をのぞきみることしかできなかったが、要は、観光カナダと裏腹に文学カナダというものがあり、カナダ人の真の姿が、そこにひそやかに、しかしまがうことなく息づいている、ということ――それを知ってほしかったのである。

（東京大学教授）